ロウきゅーぶ!に井ノ原 真人がいたら

武蔵野レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウきゅーぶ！に井ノ原　真人がいたら

【Ｎコード】

Ｎ２４８０Ｗ

【作者名】

武蔵野レイ

【あらすじ】

題名の通りロウきゅーぶ！に井ノ原　真人がいたらという無理を通した感じのＩＦストーリーです。キャラが多少違うこともありますので苦手な人はご注意ください。他に自分が書いている小説の続きの筆が進んでいないときに勢いだけで書いた小説です。暇つぶし程度に読んでもらえるとと思います。

プロローグ（前書き）

小説の始まりです。更新は不定期になりますがお願いします。時間軸は一巻の途中からということになります。

プロローグ

井ノ原真人は、慧心学園の前に立っていた。なぜそんな場所に立っているのか？それは話を遡ることになる。

井ノ原真人は、第一志望であった理樹達と同じ全寮制の学校に落ちてしまった。しかし何故かそれなりに進学実績もあるはずの七芝高校には受かり入学することになった。最初こそ理樹達と離れることになり落ち込んだもののたまたま隣に座っていた長谷川　昴というバスケを愛する男と友達になり、それなりに楽しく過ごしていた。そして、昴の幼馴染である荻山　葵、昴とは中学時代からの付き合いである上原　一成とも仲良くなった。しかし、そんな日々を壊す事件が起こった。昴の所属していた男子バスケ部が廃部になってしまった。理由は、バスケ部入部直後に水崎が起こした小学生女子との駆け落ち騒動不祥事のためバスケ部は1年間の活動停止処分になってしまった。この事件を境に昴はどことなく腐り始めてしまったのだが、昴の叔母で口は悪いが身体能力は謙吾以上にあるのではないかと思われる篁　美星の下で何かをやりだしてからは多少は張り合いが出てきていたように見えた。しかし、なぜかその篁　美星に「お前筋肉に詳しいんだって？ちょっと頼みごとがある。」と言われてここ慧心学園に連れてこられたというわけだ。「お前の筋肉が必要だ。」と言われては断ることはできないのだが・・・。

そんなわけで現在真人は慧心学園の前に立っていた。
真人「えーと、確か体育館にいけばいいんだよな？」
誰に言うでもなくつぶやき、何故か体育館に行けと言われていたので真人は向かうことにした。ドアに手を掛けると中からは昴の声と女の子と思われる声が聞こえてきた。
真人「何をしているんだ？」

真人はそうつぶやくとドアを開けた。すると昴と他の五人の女の子がいた。
昴「な、なんでここに！」
真人「いや、昴の叔母に頼まれて来たんだが・・・。」
昴「ミホ姉が！・・・悪い、ちょっとだけ席を外す。」
そういって昴は一時的に席を外した。
真帆「なあなあ、おにいちゃんは誰。すばるんとどういう関係なの？」
すると一番活発そうな女の子が声をかけてきた。すばるんとは昴のことだろう。
真人「俺の名前は井ノ原　真人。昴とは友達だな。」
真帆「それじゃあ、まーたんだな。私の名前は三沢真帆。すばるんの友達なら私とも友達だな。」
その間に他の四人の女の子も自己紹介をしてくれて顔と名前は一致した。そして自己紹介が一通り終わった後、昴が帰ってきた。
真人「どこいってたんだ？」
昴「ミホ姉に連絡を取ってきた。どうやら俺が人手不足だとつぶやいていたから、お前に手伝ってもらおうとしてこっちによこしたらしい。」
真人「昴はしらなかったのか？」
昴「まあな。というかこのことは他のやつらには秘密だからさ。」
少し女の子たちに聞こえない程度に昴は声のボリュームを下げた。
昴「ほら、バスケ部は小学生女子に手を出して部活停止になっただろう。」
真人「ああ。」
真人は納得した。
昴「でもばれた以上仕方ないよな・・。しょうがない、今は緊急事態で人手が足りないんだ。手伝ってもらえるか？」
真人「もともと手伝うつもりで来たんだけどよ、ただ俺バスケのことはあまり知らないぜ。」

昴「大丈夫、練習メニューとかは俺が考えるから。真人は補佐的な役割をしてくれればいい。あ、あとこのことは秘密な。」
真人「おう、わかったぜ。それじゃあ、早速やるとするか。」
昴「ああ。みんな、今日からこの真人がコーチ補佐として手伝ってくれることになった。バスケの詳しいルールとかは知らないけど筋肉のことにやたらと詳しいから筋肉痛になったときとかは相談するといい。」
みんな「はーい。」
昴「それじゃあ練習を再開するぞ。」
こうして真人は慧心学園女子バスケ部の手伝いをすることになった。

プロローグ（後書き）

とりあえず真人が女子バスケ部の練習を手伝うことになりました。
プロローグも終わり、次回から本編が始まります。

ｓｃｅｎｅ．１　初練習（前書き）

真人が練習に関わり始めます。拙い文章ですいません。

scene. 1　初練習

まず真人は練習で愛莉、ひなた、智花のランニングに付き合うことになった。昴はどうやら俺の走りのフォームがいいということでフォームを見てもらおうとしたらしい。そんなわけでできるだけペースを遅くして走ろうとしているのだが、なかなか他の、それも小学生のペースに合わせるというのは走り慣れているとはいえなかなか難しかった。

真人「これくらいのペースでいいか？」

愛梨「あ、はい。このペースなら何とか大丈夫です。」

ひなた「おー、どんとこい。」

智花「はい、大丈夫です。」

どうやらなんとかペースをつかめたようだ。昴の話ではどうやらこの女の子達はもうすぐ女子バスケ部の存続をかけて男子バスケ部と勝負をするらしい。スタミナが一番の心配点だが、そうそう簡単にスタミナはつかない。ならばなるべく疲れないフォームでコートを走れば少しでも体力切れを抑えられるかもしれないということだった。

真人「そういや、男子バスケ部との試合っていつやるんだ？」

智花「あ、まだ聞いてなかったんですね。今度の日曜日です。」

真人「今度の日曜日っていうと本当にすぐだな。」

真人達はそんな会話をしながら体育館に戻ってきた。

真人「戻ったぜ、昴。」

ひなた「おー、今日はちゃんと走れたー。」

昴「お帰り、それじゃあ昨日と同じ練習をしようか。智花は昨日と同じようにドリブルで愛莉を抜いて愛莉は頑張ってその場から動かないで。真人はひなたちゃんの練習に付き合ってくれ。」

真人「何をすりゃあいいんだ？」

昴「お前、ドリブルはできるか？」
真人「直進するくらいはできるぜ。」
昴「それで十分だ。真人はひなたちゃんの横をドリブルで抜いてほしい。ひなたちゃんは真人にマッチアップしてなるべく引きつけて、尻もちをついてほしい。」
ひなた「おー、分かった。」
真人「それくらいならできるぜ！」
そう言って真人達は練習を開始した。
真人は言われたとおりにドリブルをしてひなたを抜いた。その際、ひなたはなるべく引きつけながら尻もちをつくということを繰り返した。正直、真人はこれは何の練習なのか分からなかったが、バスケのことは昴が何倍も詳しいことは分かっているのでその通りに練習を繰り返した。そしてそのうちに今日の練習時間の終わりが来た。
真人「地味にあのドリブルで抜く練習、足腰の筋肉を使うな。いい筋トレになりそうだぜ。」
昴「お前の筋トレになってもしょうがないんだが・・。そういやお前は明日は来れるのか？」
真人「明日？筋トレをして忙しく過ごす予定だが。」
昴「・・・それじゃあ暇なんだな。明日俺のうちにこい。そこで練習会をすることにする。」
真人「おう、分かった。ところで俺のやってる練習って何なんだ。バスケをあまり知らない俺から見ても変なんだが。」
昴「それはかくかくしかじか。」
真人「理由は分かったけどよ。まだあの子達にはいってないのか？」
昴「あー、ちょっと言いづらくて。」
真人「しかし、今のあの子達を見てると本当に勝ちたいと思っているように見えるぜ。そんなこと気にしないんじゃねえか。」
昴「そうだな・・。明日練習にでも言うよ。」

そうして翌日、女子バスケ部は昴の家に集合した。

智花「こんなに大勢でおしかけてしまってご迷惑ではないですか。」
真人「おう、大丈夫だ。」
昴「なんでお前が答えるんだよ！でも智花、俺が呼んだんだから気にしなくていいって。母さんのもてなし好きは知ってるだろ。」
そう言って昴は智花の頭に手をおいた。
智花「あ、ありがとうございます。」
昴「それじゃあ、早速練習しよう。パス回しの練習からしよう。」
真人「俺はこの場所に立っているだけでいいのか？」
昴「ああ、お前ならいるだけでそれなりにプレッシャーがかかるからな。それにマークがついたときの練習は今からじゃ間に合わないからな。それじゃあ智花から行くぞ。」
智花「はい。愛莉。」
少し大きめのパスを出したが愛莉には十分届く場所にパスを出した。
あの高さのパスを取れるのは試合当日は愛莉しかいないだろう。
愛莉「と、と。ひなちゃん。」
ひなた「おー。まほ。」
真帆「おうっ。サキ。」
紗季「はいよ。」
そして紗希は真帆のパスを受け取ると見事にシュートを決めた。
昴「よし、いいぞ。今度はひなたちゃんからやってみようか。」
ひなた「おー。愛莉。」
ひなたが愛莉に向かってパスを出したが方向が少々ずれてしまって、愛莉は走った。
愛莉「あっ。」
真人「おっと。」
そして一生懸命走ったが、真人にぶつかってしまった。
愛莉「す、すいません。」
真人「悪い、大丈夫か。」
何とか真人は愛莉が倒れる前に手を出すことに成功した。いくら愛莉の背が高いとはいえ、真人も男子の平均を上回る背があり、愛莉

が弾き飛ばされることになってしまうところだった。
ひなた「ごめん。だいしょうぶ？」
愛莉「あ、大丈夫だよ。」
紗季「それにしてもいつまでくっついているのかしら。」
愛莉「あ、ごめんなさい。」
そう言って愛莉は赤くなってすぐに離れた。
真人「俺の方こそ悪かったな。俺の筋肉が至らないばっかりによけられなくて。」
真帆「筋肉があれば避けられるのか？」
真人「おうよ。筋肉があればこの家の塀も素手でこわすことだって可能だぜ。」
真帆「そいつはすげー。」
昴「おいおい・・・。嘘を教えるなよ。」
真人「嘘じゃないぜ。なら今証明しても・・・。」
昴「人の家を壊す気か！」
そんなハプニングはあったものの、練習を続けていると
七夕「みんな、お風呂準備で来たわよ。」
真帆「なゆっち、サンキュー。」
紗季「こら失礼だろ、年上に向かって。」
七夕「あら、いいのよ。むしろ嬉しいわ。あと、お風呂に入ったら夕食の準備もあるからね。」
昴「よし、それじゃあみんな、ここらで練習を切り上げよう。」
そうしてこの日の練習は終わった。

ｓｃｅｎｅ．１　初練習（後書き）

次回は昴の家での話がもう少し続きます。

scene. 2　夕食会

女子バスケ部のみんなは一斉にお風呂に入った。
真帆「ちょーせまいな。この風呂。」
紗季「いや、これが普通だから。」
智花「そうだよ、真帆の家のお風呂が広すぎるんだよ。」
その横ではひなたが愛莉の胸に顔をうめていた。
ひなた「おーふかふか。」
愛莉「ひなちゃんだめー。顔を埋めないで。」
真帆「あ、ずるいぞ。」
そう言って真帆が暴れたので風呂は軽いパニックに。
紗季「痛っ。お前はいいから体を洗ってこい。」
真帆「うー、しょうがねえなー。じゃあもっかん、背中洗って。」
智花「あっ、うん。」
紗季「あまり甘やかさなくていいよ。」
智花「ううん、こういうの何かいいなって思うし。こうやってみんなと一緒にいるの。」
愛莉「あ、なんとなくわかる。」
ひなた「おーひなもー。」
真帆「ふふふ、仲間外れだな。」
紗季「うるさいな・・・。私だって。」
真帆「うーん、何か言ったかな。」
紗季「楽しいですよ。私だって！」
真帆「わっははは。それじゃあもっかん、背中頼むぜ。」
しかし智花は背中を洗わずに真帆を抱きしめた。
真帆「おっ、どうしたんだ。」
智花「ありがとうみんな。私みんなと会えてよかった。だからこの場所を守っていきたいの。これからも思い出を作っていきたいの。」
真帆「そんなのあたりまえだろう。」

紗季「みんな同じ気持ちよ」
愛莉「そうだよ、私も一生懸命頑張るから。」
ひなた「ひなも頑張る。」
真帆「そりゃそうと・・・。」
智花「うん？」
真帆が何やらさっきまでと違う声色で言った。
真帆「もっかん、背中から伝わる感触が固いな。ここまで育っていないなんて。」
智花「そんな・・・。気にしてるのに。」
紗季「いや、待て。一番育っていないのはお前だから。」
真帆「えっ。」
智花「ちょっと見せて。・・・・真帆、どっちが背中か分からないじゃない。」
真帆「うっ・・・嘘だーー。」

そのころ、昴と真人はリビングにいた。
真人「結構風呂長いな。」
昴「それは俺も思う。何で女の子って風呂が長いんだろうな。」
昴も長年抱いていた疑問を口にした。
真人「風呂に最初に入るのはいいんだけどよ、中学の頃の修学旅行でも男子と女子の風呂の時間が分かれていると男子の時間が女子に比べて妙に短かったりするんだよな。」
昴「あー、俺のところも男子の方が短かった。しかし、五人も一斉に風呂に入って大丈夫かな。家の風呂は普通の大きさだし、五人も入ると狭い気がする。」
真人「大丈夫じゃねえ。俺も小学校の頃は恭介や理樹達四人でよく風呂に入っていたし。」
昴「恭介？」
真人「ああ、リトルバスターズの仲間だ。」
昴「リトルバスターズ？昔からの仲間ってことか？」

真人「そういうことだな。」
昴「幼馴染ってことか。ところで妙に風呂が騒がしくないか？」
真人「そうか？」
その直後、いきなり風呂場の方からドアが開いた。
真帆「すばるーん、まーたん！」
昴「なっ！」
何といきなりバスタオルを巻いただけの真帆がドアを開けてこっちに来た。
真帆「こっちに来て私ともっかんのどっちの方（の胸）が大きいか比べて。」
智花「ちょっ・・・。」
昴「一体何を比べるんだ？というかいいから服を・・・。」
七夕「あらあら、元気ねー。」
昴「いやいやそんなこと言ってる場合じゃないだろ。」
真人「（背は）真帆の方が少し大きいんじゃないか。」
昴「お前も何を普通に答えているんだよ！」
真帆「ほら見ろ、私の方が大きいってさ。」
昴「・・・。」

そんな風呂場の騒ぎもなんとかおさまり、夕食の時間となった。
真帆「おー、こいつはうめえ。さすがなゆっち。」
真人「うめえ、この料理。昴がうらやましいぜ。」
なんともにぎやかな夕食となった。そんな夕食も終わり、三人にある作戦を伝えるために昴は立ち上がった。まず三人から話そうと思って真人に愛莉とひなたを連れ出してもらった。
昴「ちょっといいかな？」
真帆「何だすばるん。」
そうして昴が三人に話をすると
真帆「あいつ、すばるんにも気づかれてやがる。」
真帆は爆笑しながら言った。

昴「やっぱりそんなんだね。」
紗季「はい、クラスの中では公然の秘密になっています。そこ、つこうと思っています？」
昴「うん、ただみんなの意見も聞いておきたくて。」
紗季「それこそ愚問ですよ、勝つためには私たちなんでもやります。」
昴は他の紗季、真帆、智花の三人の顔を見て決心した。
昴「分かった。やろう。」
紗季「二人には私たちから伝えておきますので。」
昴「そうしてくれると助かる。」
こうして作戦の一つのピースは埋まった。

ひなた「おー、まさとどうした？」
真人はとりあえず言われたとおりに愛莉とひなたを連れ出してとりあえず庭へ出た。しかし、特に何をするかは考えていなかったので真人はとりあえず何かを言わなければと思い、言った。
真人「筋トレに付き合ってくれ！」
愛莉「き、筋トレですか？」
真人「おう、俺は筋肉にかけてはエキスパートだからな。筋トレをすればバスケにも役立つはずだ！」
ひなた「ならひなやるー。」
愛莉「こんな私でも役に立てるなら・・・、私もやってみます。」
真人「そうだな・・・、まず腕立て伏せできるか？」
二人にはまず腕立て伏せをしてもらったがひなたはプルプル震えてできなかった。愛莉のほうは予想していたよりも回数をこなした。
ひなた「あいりすごーい。ひな、一回もできなかった。」
愛莉「そ、そうかな。」
少し赤くなりながらも愛莉は答えた。
真人「愛莉、普段から筋トレとかやってるのか？」
愛莉「えっと、週に三回くらいやってます。」

ひなた「ひなも週に三回筋トレをすればできるようになる？」
真人「ああ、できるようになるぜ。その前に試合があるみたいだし、走り込みから始めることになるだろうけどな。」
ひなた「おー、じゃあひなた走るのがんばる。」
愛莉「結局力になれないかもしれませんけど私も、走り込み頑張ります。
真人「俺は筋肉を鍛えようとしている奴の味方だからな。応援するぜ。一緒走るくらいならいつでもできるからよ。」
そんな会話をしていると帰る時間になり昴が呼びに来て、その日の練習は終わった。

ｓｃｅｎｅ．２　夕食会（後書き）

ロウきゅーぶ！のアニメの方では現在葵さんが活躍していますが、この小説内で本格的に葵が登場するのは、しばらく先になると思いますのでお知らせします。

ｓｃｅｎｅ．３　試合前日（前書き）

今回は愛莉がメインの話です。

ｓｃｅｎｅ．３　試合前日

試合前々日となる金曜日、その日は終日体育館で練習することになった。昴の予想通り、なんとか攻撃面は、不安定ながらも形ができてきた。守備面こそ、鍛えられなかったものの何とか試合になるという手ごたえを昴はつかんでいた。そして練習が終わり、

昴「みんん、お疲れ様。明日は休養日に充てるから。」

真帆「えー、もっと練習したいよ。」

紗季「ほらわがまま言わない。休むことも練習のうちなんだから。」

真帆が多少ごねたものの、なんとか説得した。

そして試合前日となる土曜日、真人は明日に試合があることもありいつも以上にランニングをしていた。すると、河原で見知った顔が一人座っているのが見えた。

真人「おーい、愛莉。何やってんだ？」

聞こえていないのか、愛莉は振り向かなかったので近くによってみることにした。

真人「愛莉。」

そういって肩に手をかけるとようやく気づいたらしく

愛莉「ひゃあ、井ノ原さん。いつからいたんですか？」

真人「今さっきだけどよ。声をかけても全然気づかなかったからよ。」

愛莉「そうですか・・。」

真人「愛莉はいったいここで何してたんだ。」

愛莉「その・・、不安になっちゃって。」

真人「不安？明日の試合のことか？」

愛莉「はい、明日の試合で私が足を引っ張っちゃうんじゃないかと思ったら不安で・・。」

真人「でも愛莉は練習をして俺や智花がドリブルで抜いても目を開

けてその場に立っていられるようになっただろ。」
愛莉「でも、相変わらず私はうまく立ち回ったりすることができなくて・・。」
真人「結構いい動きもしていたと思うけどな。」
愛莉「そんなことないです、私なんかが・・。」
真人「いや、そんなことはないと思うぜ。」
愛莉「どうしてですか？」
真人「俺の筋肉が愛莉はよくやっていると告げているからな。」
愛莉「へっ。」
愛莉はその返答は予測していなかったのかしばらく呆けていたが、やがて笑いだした。
愛莉「ふふふ。」
真人「お、笑ったな。」
愛莉「あ、すいません。」
真人「いや、別にいいいぜ。愛莉も元気がでたみたいだし。筋肉は人が笑っている時と一生懸命に何かをやっている時に輝くからな。」
愛莉「井ノ原さん・・・、ありがとうございます。なんだか少し元気が出たみたいです。」
真人「それは良かったぜ。他のみんなもお前のことを足引っ張るなんて思っちゃいないと思うぜ。」
愛莉「井ノ原さんは優しいですね。私、最初に会ったときは少し怖いなと思っちゃったんですけど・・。」
真人「そうだったのか！」
真人はその言葉を聞いて少し落ち込んだ。
愛莉「あ、で、でも。今はそんなこと全然思ってないですから。」
真人「そ、そうか。優しいな、愛莉は。」
愛莉「そ、そんな私なんて。」
真人「お礼に試合当日には俺の筋肉を貸してやるぜ。これで女子バスケ部は絶対に勝てるぜ。」
愛莉「あ・・。分かりました。絶対に明日の試合に勝って見せます。

」
愛莉にしては珍しく力強く宣言した。
真人「あ、あとよ。井ノ原じゃなくて真人って呼んでくれねえか。どうも井ノ原って呼ばれると違和感があるんだよな。」
愛莉「え、名前ですか。」
真人「おう。嫌なら仕方ないんだけどな。」
愛莉「嫌というわけではないです。そ、それじゃあ・・ま、真人さん。」
真人「やっぱりその呼び方の方がしっくりくるな。愛莉だけ井ノ原って呼び方だから気になってたんだよな。」
愛莉「あ、あの今日は本当にありがとうございました。明日の試合もこんな私ですけど頑張ってみます。あの場所を失いたくないから。」
真人「おう、その意気だぜ。俺も明日は全身全霊筋肉を使って応援するぜ。」
愛莉「はい、真人さん。」
そうして真人は愛莉を送って帰ることにした。普段はデリカシーのないところが多いが真人はこういうところで気が利いて送り迎えをしたりする。
愛莉「真人さん。」
真人「うん、どうした？」
愛莉「私、今日はすごく緊張してて。真人さんに会って話をしていなかっら当日に熱を出して倒れていたかもしれません。私、苦手なことが目の前にあると重圧にいつも負けちゃって。」
真人「苦手なことは誰にでもあるだろ。俺も野菜を食べろとよく言われたが、いまだに苦手だぜ。」
愛莉「そ、そうなんですか。」
真人「ああ、それに筋肉を鍛えるのには必要ねえからな。」
愛莉「それは体に悪いと思いますけれど・・。」
真人「と、あれが愛莉の家か？」

愛莉「あ、そうです。それじゃあまた明日。」
真人「おう、明日な。」

試合当日、真人はいつもよりも早く起きた。なんとなく落ち着かないのでいつもより早くランニングを始めた。それが終わると試合時間よりだいぶ前となる時間に試合会場に到着した。するとそこにはすでに昴と美星以外のメンバーが来ていた。
真帆「おせーぞ、ようやく気たか。」
紗季「いや、私たちが早く来ただけだから。」
真人「昴達はまだ来てないのか？」
智花「はい、どうやらちょっとした買い物があるっていって出かけているみたいです。」
真人「そうか。」
ふと横を見ると見知らぬ男が立っていた。
？？？「おはようございます。私、男バスの顧問兼監督をしているものです。あなたがコーチですか？」
真人「いや、俺は違うけどな。コーチは昴っていうすご腕が別にいるからな。」
どうやらこいつが通称カマキリと呼ばれている男バスの監督らしい。
カマキリ「ふふ、コーチが逃げ出さなければいいんですけどね。」
真人「それは大丈夫だ。何せ昴はお前より優秀な奴だからな。」
カマキリ「ふ、そうですか。まあせいぜいあがいてくださいよ。」
そう言ってカマキリは去って行った。真帆や紗季はそれを憎しみのこもった視線で見送った。
入れ替わりのように昴達も到着した。
昴「おはよう、みんな。」
真帆「あ、遅いぞ。」
昴「ごめんごめん。早速だけど打ち合わせしていいかな。」
そうして打ち合わせを始めった。この打ち合わせから勝利への第一関門が始まった。

ｓｃｅｎｅ．３　試合前日（後書き）

交換日記　試合前日

智花「いよいよ試合だね。私眠れなくて。」

真帆「もう寝ろって。もうこんな時間だぞ。」

紗季「本当だよ。頼んだからね、エース。」

愛莉「えへへへ、私だけじゃなかったんだね。」

ひなた「おー？愛莉なんか機嫌いい？」

紗季「何かあったのかしら？」

愛莉「今日、真人さんに励ましてもらってちょっと元気が出て。」

紗季「へー、そうなんだ。それにしても真人さんって呼ぶようになったのね。」

真帆「そういやそうだな。」

愛莉「え、いやそれは真人さんに頼まれて。」

紗季「ふふ、まあいいけど。じゃあみんな寝るわよ。」

次回は、ついに試合開始の予定です。

scene. 4　試合開始

ついに試合開始が開始されようとしていた。今まさにジャンプボールが投げられようとしている。ジャンパーは智花だ。審判の手からボールが放たれた。ついに試合開始だ。

真人「よっしゃ。」

智花は見事にジャンプボールを成功させ、真帆にボールが渡る。そのボールはパスを挟んで愛莉に渡ろうとしていた。それはよわよわしいパスだが誰も取ることはできないパスだった。愛莉の身長を持ってしか取れないパスだ。そのまま愛莉はゴールを決めて仲間から賞賛の嵐を受ける。その後も愛莉に順調にパスが渡り、愛莉がこちらを向いて目が合ったので親指を立てるとはにかんだような笑みになった。すると美星が種明かしをしろと昴に言ってきていて昴は説明を始めた。あのやり取りを思い出すとこいつはある意味恭介を上回る策士じゃなかろうかと感心する。

試合前の打ち合わせのために真人と昴と女子バスケのみんなは集まった。美星はお楽しみを取っておくためといい、あえて加わらなかった。そこで昴はポジションを五人にそれぞれ割り当てた。といってもみんなは俺と同じくポジションを聞いても智花以外は何の事だかわからないようだった。だが、昴はそれこそが狙いだった。この作戦は昴と智花が考えて、俺に協力を求めてきたものだった。そして終に勝負の愛莉のポジション発表に入った。

昴「愛莉はスモールフォワードだ。」

愛莉「えっ。」

愛莉は意外そうな声をあげた。ここが勝負どころだ。

真人「俺との練習で愛莉はスモールフォワードの資質があると筋肉が告げていたから昴に推薦したんだ。」

愛莉「そうだったんですか？」

真人「おう、昴はセンターがいいと言ったんだが、コート内で得点を取ることを役割のスモールフォワードの役割が愛莉にはふさわしいと思ってな。」
真人はバスケのポジションにほとんど知らないのだが、昴と何度も打ち合わせしたセリフをひたすらに言う。ずいぶんはしょって入るが厳密にはスモールフォワードは得点を取る役割もあるが全体的にコートを見渡せる能力が必須である。もちろん今の愛莉にその役割ができるわけはないが背が高いことを気にしている愛莉にゴール近くでのオフェンス、ディフェンスをするセンターとしての役割をしてもらうためについたウソである。正直、この手の演技は得意ではない者の必死に言葉を紡いだ。ここで賭けに失敗すれば全てが終わってしまう。
真人「それで昴は失敗すればセンターという条件でスモールフォワードをやらせてくれると言ってな。どうだ、やってみないか？」
愛莉「私がスモール・・。失敗すればセンター・・。」
愛莉はうまく作戦に乗ってくれたようだ。
愛莉「私、がんばります。スモールフォワード！」
昴「よし、それじゃあその意気に免じてスモールフォワードの役割を教えるよ。役割は・・・・。」

昴「これが種明かしだよ。」
美星「何だ、そういうことだったのか。それじゃあ本当の意味で前向きになれたわけじゃ・・」
美星は彼女たちの先生として少し落ち込んだ顔を見せた。
昴「ごめんな、ミホ姉。でも、他に手は・・。」
真人「この試合が終わったら二人でこのことは謝ることにしてるからさ。今回は・・。」
美星「分かってるよ。」
美星はただそれだけ答えた。普段は見せない顔が見れたような気がした。

そして、再び得点が入ると相手チームの監督がタイムアウトのコールをした。ここまでは昴の立てた作戦通りだ。このタイムアウトでは昴が簡単な指示を与えてみんなをひたすら休ませることだけに専念した。そして、再び試合が始まった。

試合が開始されると、やはり愛莉はマークされた。しかし、そこは想定の範囲内ですかさず真帆、紗季にパスが渡りゴールを決めた。あのシュートをうった場所からしか入らないのだが、この試合だけなら気づかれないまま乗り切れる。そして前半戦は、女バスの優位のまま終えた。

後半までのハーフタイム。美星の明るい出迎えなどもあり士気は確実に高まっていく。真人自身、愛莉に前半の活躍をたたえて声をかける。

真人「愛莉、前半はすごかったぜ！」

愛莉「みんなでバスケを続けるために頑張らなくちゃいけませんから。」

真人「そうだな。後半も頑張れよ。」

そして横をチラリと見たときに真帆に話しかけられた昴が一瞬、不安を感じさせるような顔をしていたような気がした。どうやら、みんなには分からなかったようだ。真人自身、気にはなったがそれよりもみんなを応援する方がいいと思い、みんなを鼓舞し続けた。

後半が開始してからしばらく経ってから異変が起きた。真人の目にもはっきり分かる女バスのみんなのスタミナ切れしていた。そこに男バスの猛攻を受けあっという間に同点に追いつかれ、昴はタイムアウトを告げた。昴は、そこでおおまかな指示を選手に告げて休ませた。真人は励ましの声をかけることしかできなかった。

試合開始と同時に猛攻を受け、得点差がどんどんついていく。そんな中、ふらふらになりながらも愛莉がボールを拾った時には真人は思わず「よっしゃ。ー。」と言って感動してしまった。この一つの守りが後につながることを願いたい。

試合終了が近づく中、ついに最後の勝負の時間になった。エースを解放する時間が。その時間になったとき女バスのみんなはエースに向かってボールを託した。それに
智花「任せて。」
そういうと智花は風のように走った。その速さに男子は誰もついていけずまず一つ目のゴールを決めた。続いて二本目のゴールも決めた。しかし、当然智花が攻撃に回った分の穴はできる。
竹中「こっちだ。」
そう、相手の男バスのエース、竹中のマークがなくなるというもろ刃の剣だった。そこに最後の秘密兵器が投入される。
昴「ひなたちゃん、マッチアップだ！」
ひなた「おー、たけなかにマッチアップ。」
竹中「なっ。」
竹中は一瞬面くらうが、すぐにひなたの横を抜ける。その時、ひなたは
ひなた「おー。」
尻もちをついた。それに竹中が少し心配そうに立ち止まると審判がファールの笛を鳴らした。
竹中「あ！」
真人「よっしゃー！」
これがこの試合の最終兵器だった。竹中が好きな女の子が目の前で尻もちをついてエースを止めさせてファールを勝ち取るという真人が手伝ってひなたが身に付けたものだった。もちろん、素人が倒れても本来は笛などふかれないが、そこは竹中の好意を利用した。隣の昴も笑みを浮かべた。しかし、コートに目をやると竹中は自分の

頬をたたき、気合いをいれなおしていた。・・・これは二回目以降は通用しないな。

その後は、一進一退の攻防を繰り返し、一点差でおそらく最後の攻撃シーンとなるであろう局面を迎えていた。智花は体力が底を尽きかけながらも進んでいくが、三人の守備に囲まれてしまう。智花は三人に囲まれるとボールを放った。それは、ゴールを目指したものであろうと思ったが、とてもじゃないが入らないだろうということは真人にも分かった。

真人（終わりなのか・・・。）

おそらく隣の昴もそう考えていであろう、そのボールが落ちてきた場所には真帆がいた。

竹中「ノールックパスだと！」

そのボールは真帆の手に渡り、そのままゴールに吸い込まれていった。

scene. 5　祝勝会

試合が女バスの勝利で終わり、その日は昴の家で祝勝会が開かれた。
昴「えーと、女バスの存続が決まる勝利を祝してかんぱーい。」
みんな「かんぱーい。」
昴の母親も料理を作ってくれ、祝勝会の準備は整った。・・・しかし、その前にやらなければいけないことがある。真人は昴とアイコンタクトを交わすと
真人・昴「愛莉、本当にごめんなさい。」
二人そろって土下座をした。
愛莉「え、何で謝ってるんですか？」
愛莉はきょとんとしている。それに対して昴は正直に答える。
昴「実はきみのポジションがスモールフォワードというのは嘘なんだ。本当はきみのしていたポジションはセンターなんだ。」
愛莉「えっ。」
真人「あのときのセリフは全て嘘なんだ。」
愛莉はしばらくの間、固まっていたがやがて事態が分かってきたのだろう。
愛莉「うぐ。」
泣き声になり
愛莉「うわーーーーーーーーん。やっぱり私はデカ女なんだーー。」
本格的に泣き出してしまった。
昴・真人「本当にごめんなさい。」
真人達はひたすら謝る。そこに
真帆「すばるーん、まーたん、うそつきは禁止だー。」
真帆がげんこつで二人を殴る。・・・・結構痛い。しかし、このままでは愛莉は泣き続けてしまう。どうしようかと考えていると
昴「愛莉、聞いてくれ。確かに俺は君のことをセンターにした。でもそのときの君は輝いていた。それは君の魅力の一つなんだ。俺は

君が繊細な女の子だって知ってるから！」
昴が愛莉に対して慰めの言葉を発した。よし、俺もこの言葉に続こうとして
真人「そうだ。俺は愛莉の背が高かったとしても好きだぜ！」
という。その言葉のおかげか、愛莉は泣きやんだ。というか、他のみんなもシーンとした。どうしたのだろうかと思っていると智花の機嫌が急に悪くなり、頬がぷくっとしたかと思うと
紗季「きゃー、急展開だわ。愛莉が井ノ原さんと長谷川さんから告白を受けたわ。」
真帆「どうすんだ、もっかん。すばるんがアイリーンに告白したぞ。」
ひなた「ねえ、ひなは？ひなにも何か言って―。」
そこで昴と真人はようやく状況を理解して
昴「いや、今の言葉はそういう意味じゃなくて。」
真人「好きっていうのはそういう意味じゃ・・・。」
しかし、元来口下手な二人が誤解を解くのは容易ではなく、誤解を解くのに三十分以上かかった。それでも愛莉は元通りになったし、良かったのだろう。

祝勝会も終わりに近づいたころ、女バスのみんながもともと男バスの試合が終わるまでの約束だったコーチの続投を求めてきた。
真帆「すばるん達が守ったバスケ部だろ！きちんと責任とれよ。」
ひなた「ひなもおにいちゃん達と一緒がいいな。」
紗季「私も・・できれば続けてもらいたいです。」
智花「私からもお願いします！」
愛莉「長谷川さん、真人さん・・・。」
五人はこころから続投を求めていた。しかし、昴はもっとちゃんとしたコーチを雇った方がいいと言い断わった。真人もその方がいいだろうと思い、断わることにした。

翌日、真人は筋肉を鍛えるため、河原でランニングをしていると丁度走ってくる愛莉と出会った。
愛莉「真人さん。」
真人「よう、愛莉。偶然だな。」
愛莉「偶然ではありません。真人さんにお願いがあって。」
真人「お願い？」
愛莉「私と勝負して、勝てたら戻ってきてください。」
その言葉は真人にとって少し意外だった。気弱な部分がある愛莉が自分から勝負をしてくださいと頼んできたこと、自分にそこまでして戻ってきて欲しいといってくれたこと、その気持ちは正直言って嬉しかった。だからだろう、その申し出を受けることにした。
真人「いいぜ、それで勝負って何をするんだ？」
愛莉「あの、じゃんけんでお願いします。」
真人「え、じゃんけん！」
この流れならバスケで勝負してくるんではないかと勝手に思ってしまっていて面くらってしまった。しかし、勝負を受けると言ってしまった以上どんな勝負でも受けねばなるまい。というか、勝負内容を確認しとくべきだったぜ・・・・。
愛莉「あ、あのいいですか？」
真人「ああ、受けて立つぜ。」
そうしてジャンケン勝負を受けた。・・・・

真人は基本的にくじ運がないのだが、今回の勝負も例外ではなく、あっさりと負けてしまった。ただ、今回に限り、負けがあまり悔しいとは思わず、むしろ嬉しくさえ思っている自分がいた。昴は智花が説得に行っているそうだが、そちらの方はすぐには終わりそうにないそうだ。どうやら、智花がシュートを五十回連続で決めれば、コーチを引き受けるそうだがなかなか達成できずにいるらしい。ただ、期限は決めてなかったので毎日のように挑戦しているため達成しそうだ。ということは自分のあのジャンケンで勝ったとしても期

限なしで延々と続いたってことか！・・・戦う前から負けていたってことか。

昴のいない間も部活に顔を出した。さすがにバスケの経験がほとんどない真人が練習メニューを考えられるわけもないので、昴に頼んで練習メニューを考えてもらい、それをみんなに教えて練習してもらうという形態をとった。また、自分でもバスケのことを研究するために昴や智花に聞いてみたりした。

その日高校での昼食、真人はいち早く購買に駆け出して手に入れたカツ丼を昴と一緒に食べていた。

昴「みんな女バスの活動元気でやっているか？」

真人「ああ、というか気になるならコーチを引き受ければいいじゃねえか？」

昴「正直、もうコーチ自体は引き受けてもいいと思っているんだけどな。ただ、智花がシュートを決めれるまで待ってみようかなと思って。」

真人「そうか、まあお前が決めたならいいと思うけどな。」

昴「ところでさ、お前バスケ部同好会に入ってみる気はねえか？」

真人「同好会？お前が新しく作るのか？」

昴「ああ、この場所で新しく同好会を作ろうと思っているんだ。非公式だけどな。真人はさ、バスケに興味あるみたいだし、どうせそんなに人数はあつまらないだろうから女子バスケの活動日の月火水は活動しないようにするし。真人なら体格もいいから、時間をかければいい選手になれるって。」

実際、真人は１８３ｃｍ、８０ｋｇと体格的には昴よりも遥かに恵まれたものを持っていた。なお伸びる余地があることも考えるとバスケに向いていると言える。

真人「そうだな。やってみるか。みんなを見ていて俺もやりたいと思っていた所だ。」

昴「よし。それじゃあこれからよろしく頼むぜ。」
真人「おう。よっしゃー、俺の筋肉が唸るぜ。」

こうして真人は、バスケ同好会に入ることになった。さらに翌日、智花が五十本連続シュートを成功させ、昴のコーチ復帰も見事に決まった。

ｓｃｅｎｅ．５　祝勝会（後書き）

キャラを改めて身長順に並べると
真人（１８３ｃｍ）、昴（１７２ｃｍ）、愛莉（１７０ｃｍくらい？）、葵（１６３ｃｍ）、美星（１５４ｃｍ）、紗季（１４８ｃｍ）、真帆（１４５ｃｍ）、智花（１４２ｃｍ）、ひなた（１３１ｃｍ）
文部科学省のデータによると女子平均身長は１１歳０か月で１４２．９ｃｍ、１２歳０か月で１４８．９ｃｍ、１２歳６か月で１５１．５ｃｍとなり、この時点で男子の平均身長とほぼ同じになります。
この小説で背に関する話題が出た場合、このデータを参考にやらせてもらおうと思いますのでよろしくお願いします。

scene. 6　球技大会合宿へ

真人は放課後になると昴と一緒に女子バスケ部のみんなのもとに向かうことにした。体育館前につくと昴が何やら扉をあけることに躊躇していた。
真人「どうした、開けないのか？」
昴「いや、緊張しちゃって。」
久しぶり、と言ってもそこまでの時間がたっているわけではないが緊張するものだろうか。
真人「俺が開けようか？」
そう真人は聞くと
昴「いや、大丈夫だ。」
と言って、昴が思い切りドアを開けた。そこでまっていた光景は
「お加減はどうですか、昴様、真人様。」
女バスケ部のナース姿でのお迎えだった。真帆とひなたは笑顔でセンターで笑顔でのお出迎えをしていた。紗季は、何やら多少この姿に嫌悪感をもっているのか震えていた。愛莉と智花はというと恥ずかしがっていて顔が赤い。よく見ると五人のナース服は全部が同じというわけではなく、愛莉のナース服は丈が微妙に短かった。というかこれは何だ？と真人をもってしても疑問を持っていた所に
ひなた「おにいちゃん、具合はどうですか？」
とひなたが足にまとわりついた。隣を見ると真帆が昴に抱きついていた。真人はそこで我にかえり、
真人「そのナース服姿はどうしたんだ？」
疑問を口にした。
ひなた「あのね、まほがおにいちゃん達がこの姿をすると喜ぶって教えてくれたの。嬉しい？」
そう聞かれて思わず全身の筋肉がフル回転して、そのまま嬉しいと答えそうになった。危ねえ、俺の筋肉が反応しそうになるとは。と

にかくこの状況はまずいだろうと思ったので真人は昴とアイコンタクトをすると
昴・真人「着替えてきてください。」
と土下座をしてお願いした。

五人の少女はすぐに着替えた。というか、下に着込んであったみたいなのでどのみちすぐに着替える予定だったのだろう。というか、小学生相手に土下座を一度ならず二度までもすることになるとは・・・。
真帆「ナース姿は駄目だったか。次はミニスカメイド服にするか・・・。」
ひなた「おー、こんどは着ぐるみがいい。」
何やらまたやるような会話が聞こえたが、スル―することにした。
多分言ってもやめないだろうし。それより目下の問題は、この恰好をしてきた理由だった。
真人「球技大会があるのか。」
真帆「その通り、今度こそD組を倒してやるんだ。」
どうやら今度の球技大会に向けてやる気を起こさせるためのものだったらしい。どうやら男女混合での球技大会のため、男バスと女バスが再び対戦することになるらしい。とはいえ、真帆以外はそこまで燃えているわけではなさそうだが。
真帆「なあ、頼むよ。勝たしてくれよ。」
真帆が必死に頼み込んでいた。気持ちは正直分かる。俺も負けず嫌いだし。とはいえ、俺だけでは作戦を考えつくことはできないので昴に聞いてみることにした。
真人「昴、何かいい案はあるか？」
昴「そうだな・・、あ！」
真人「何か思いついたのか？」
昴「今回は男バスのエース竹中がいるじゃないか。」
そう言えば、前回は敵だったが今回は同じクラスに男バスのエース

がいたな。ということは勝算は十分にあるんじゃねえかと思った矢先
紗季「今回は夏陽はサッカーにエントリーしてしまったため、バスケには出ません。」
と竹中が今回出ないことを告げられた。
真人「えっ、何故？」
思わず聞いてしまった。だって男バスの練習時間をもっと増やそうとしていたような奴がなぜサッカーにエントリーするんだ？
愛莉「その、竹中君と真帆が喧嘩しちゃって・・。」
その一言で疑問は解消した。まあ、俺も謙吾とはよく喧嘩していたためか妙に納得してしまった。
真帆「だってあいつがあたしと一緒にバスケやるのはごめんだ、とぬかしやがって。」
昴「あー、まあ状況は分かった。次までに作戦を考えとくから今日のところは練習しような。」
真帆「約束だからな。絶対あたしらを勝たせてよ。」
真帆もとりあえずはその言葉で納得してその日の練習が再開された。

翌日、昴の親戚でバスケ部顧問である美星から電話があった。
美星「・・・というわけだから。よろしくー。」
そういって電話を切った。どうやら昴主催で週末に球技大会に向けてバスケ部の合宿をやるらしい。昴は特に何も言っていなかったがいつ決めていたのだろうか。まあ、そうときまれば筋肉グッズを忘れないようにしねえとな。

週末の合宿のことを考えながらランニングをしていると
愛莉「あ、真人さん。」
真人「おう、愛莉。」
またしても愛莉に会った。まあ、お互い同じような時刻にランニングをしているのだから、会ってもおかしくはないのだけれども。
愛莉「あの、真人さんが考えたんですか？合宿のこと。」

真人「いや、俺は美星から電話があって初めて知った。昴が考えたみたいだぜ。」
愛莉「そうなんですか。ふふ、合宿楽しみだなあ。みんなでお泊りするのは初めて。」
真人「そうか、俺も昴達と泊るのは初めてだからな。今から筋肉が唸るぜ。」
愛莉「でも水槽は持って行けそうにないのが心配です。」
真人「水槽？何か飼っているのか？」
愛莉「はい、熱帯魚を飼っているんです。」
真人「へー、そうなのか。泊っている間とかは親に任せられないのか？」
愛莉「大丈夫だとは思います。でも不安になっちゃって。」
真人「魚のことはよくわからねえから何ともいえないけどよ、そこまで不安になることはねえんじゃねえか。魚のことが心配なのは分かるけどよ。」
愛莉「・・・・そうですね。合宿に持っていくのは諦めます。」
真人「と、愛莉はそろそろ戻った方がいい時間じゃねえか。」
愛莉「そうですね、それじゃああありがとうございました。」
真人「お礼を言われるほどのことはやってねえけどな。それじゃあな。」
そして、真人はその後軽く走ってから家へ帰った。

翌日、女バスのみんなの練習のために体育館に向かった。いつも通りの練習をしているのだが、何かおかしい。昴の反応が微妙に変である。どうも女バスのみんなが合宿について話している時にどうも要領を得てないような気がするのだ。しばらくして昴が聞いてきた。
昴「真人、みんなは何をあんなに楽しみにしているんだ？俺は特にまだ作戦とか考えついたわけじゃないんだが・・・・。」
真人「何って合宿のことじゃねえか。」
昴「合宿？」

真人「ああ、お前が主催で球技大会に向けての合宿を開くと美星が言ってたが。」
昴「いや、聞いてないぞ。」
真人「いや、でもみんなは合宿が開かれると思ってるぞ。」
昴「・・・・・、とりあえずミホ姉に後で聞いてみる。」
どうも昴は今回の合宿のことを知らなかったようだがどうなっているのだろうか。

翌日、昴から電話がかかってきた。
真人「どうだった？」
昴「どうやらミホ姉にはめられたらしい。仕方ないから明日は予定通り合宿を開くよ。」
真人「・・・・・、がんばれ。」
昴「・・・頼りにしてるぜ。真人。」
ガチャッ。
どうやら美星が昴に秘密裏に計画していたものだったらしい。とはいえ、俺自身も合宿を楽しみではあったりするので嬉しくもあるのだが。さてと、明日のために筋肉グッズをそろえなくては。あと、バスケの本も読まねばなるまい。真人は来るべき明日のために荷造りをした。

翌日、合宿の集合時間ぎりぎりになってドアを開けると一面の白粉が舞っていた。・・・・・何だこりゃ。真人が疑問を感じて近くにいた昴に聞いた。
真人「なあ、昴これはどういう状況だ？」
昴「・・・・さあ。」
昴も分からないらしい。どうも奥にいる二人の人影の真帆と・・・・・竹中が原因と思われるが。というか、竹中も合宿に参加するのか？そんな様々な疑問が渦巻く中、合宿はスタートした。

ｓｃｅｎｅ．６　球技大会合宿へ（後書き）

次回から球技大会の合宿が本格的にスタートします。

ｓｃｅｎｅ．７　球技大会合宿スタート

球技大会の合宿は体育館の掃除から始まった。きな粉が舞っている状況では練習は不可能なので、その掃除に追われた。昴はその間に美星の元に行き、何故竹中がいるのかを聞きに行っていた。

真人「ようやく掃除が終わったぜ。」

なんとか昴が帰ってくる前に掃除を終わらせた。真帆と竹中もみんなが取り持ってくれたおかげで現在は直接的ないさかいはない状況だ。とはいえ、竹中は女バスのメンバーとは離れたところにいるし、真帆も不機嫌である。真人はとりあえず、竹中に話しかけた。

真人「竹中、こうして話すのは初めてだな。」

そう言えば、竹中と話すのは初めてなのでとりあえず挨拶をすることにする。

竹中「何だよ？というかお前は変態コーチの手伝いをしてるやつだな。」

とりあえず、反応はしてくれた。変態コーチとは昴のことだろうか。

真人「俺は昴の手伝いをしている井ノ原真人だ。」

竹中「お前もバスケをやるのか？」

真人「昴と同じバスケ同好会で活動している。バスケはその時から始めている。」

竹中「ふーん、それじゃあバスケ初心者かよ。なんでそんな奴がバスケを教えてんだよ。」

真人「俺は昴に女バスのみんなと一緒にバスケを教えてもらっているからな。俺が教えているのは筋肉の活用法ぐらいだぜ。」

竹中「ふーん。というか、筋肉の活用法を教えているって何だよ。」

真人「知りたければ筋肉いぇいいぇーい！と唱えればお前にも教えてやるぜ。」

竹中「言わねーよ！」

真人「そうか、言いたくなったらいつでも言ってくれよ。」

竹中「・・・・、お前と話していると力が抜けてくるぜ。」
真人「そりゃそうと、お前もなかなかの筋肉を持ってるな。触ってもいいか。」
竹中「よくねえよ。」
と会話は弾んだのか弾まないのかよくわからないうちに竹中はランニングに行ってしまった。

その後、戻ってきた昴の話によると予想通り竹中と真帆の喧嘩を解消しようとした美星の差し金だった。
昴「しかし、真帆と竹中の喧嘩の理由も分からねえんだよな。」
真人「女バスの誰かに相談したらどうだ？」
昴「そうだな、そうするか。それじゃあ智花に相談してみるよ。」
真人「じゃあ俺は筋肉が必要な事態に備えればいいんだな。」
昴「いや、筋肉が必要な事態なんて起こらないから・・。」
真人「何だ、何的外れなことを言ってんだ、筋肉が必要な事態なんてねえ。筋肉バカは隅にいてくれとでも言いたげな顔は。」
昴「いや、そこまでは言ってないから・・。」

その後、昴が智花に相談に行ったので真人はその間真人は筋トレをしていた。
真人「９８，９９，１００」
丁度百回終えたところで昴が戻ってきた。
昴「みんな、ゲームしないか？丁度ミホ姉から借りたゲームがあるんだけど。」
真帆「ゲーム！やるやる。」
真帆が最初にやる気を見せたのを皮切りに畳の部屋でゲームをすることになった。最初は乗り気ではなかった竹中もひなたがひなた「おー、たけなか。このとかげさやって。」
と言ったのをきっかけにゲームに参戦した。どうやら、二人一組となって相手ペアと戦うゲームらしかった。真人も誘われたので愛莉

とペアになってやってみたものの
真人「うお、このヤモリ動きが遅くないか？」
愛莉「うう、私のトカゲさんがやられちゃった。」
というように真帆・竹中のペアの前に全滅した。まだまだ筋肉の鍛え方が足りなかったようだ。とはいえ、子供たちの間の険悪な雰囲気はなくなっていて、和気あいあいとした雰囲気がただよっていた。しかし、ある少女の参戦によって場の雰囲気は一変する。
紗季「トモ、そろそろやってみない？」
紗季が智花をゲームに誘った。そう言えば、智花はさっきから見てるだけで一回もやっていなかったな。智花は最初は遠慮していたものの、やがてやることを決意した。初心者だから最初は戸惑うかもななどと思っていたが
智花「えいっ、えいっ。やったー。」
そこから智花の破竹の連勝が始まった。相手の竹中と真帆のペアもそれなりに強いと思うのだが、智花がそれを上回る身体能力を見せ付けたのだ。そして、真帆と竹中は再び取っ組み合いを始めてしまった。二人を引き離すことには成功したものの、場は険悪なものとなってしまった。

その後も事あるごとに真帆と竹中は取っ組み合いを始めた。合宿が始まってからしばらく経った頃
真人「俺の筋肉がそろそろ栄養を求めてきているぜ。」
昴「いや、普通に腹がすいたって言えよ。でもそうだな、そろそろ夕食を作り始めるか。」
そうして、みんなで夕食を作ることにした。
真人「というか、俺が包丁の役割かよ！」
昴「まあくじの結果だからな。とはいえ、正直お前に包丁を使わせるのは危ないような気がするな。」
昴も心配を口にしたが、杞憂に終わることになった。というのも昴が細工して竹中と真帆を同じペアにしたのだが、それで材料のカレ

ー粉、小麦粉を渡したのが失敗だった。
真帆・竹中「粉！」
どうやら、竹中と真帆はきな粉が舞った時のことを思い出したようでお互いに粉をぶつけ出した。
紗季「いい加減にしろ、馬鹿！」
紗季と一喝により場は収まったものの、再び場は険悪なものとなってしまった。

真人達はあの後、当初とは計画が違ったものとなったもののなんとか料理を作り終え、夕食を食べ終えた。
紗季「あの、あのお風呂に入る時間はどうしますか？」
そんな質問が紗季からあった。
真人「俺はいつでも構わないけどよ。」
真帆「私は先風呂がいい！」
愛莉「あ、私も。」
ひなた「ひなもそれでいい。」
紗季「えと、それじゃあ先にお風呂に入らせてもらっていいですか？」
竹中「ふん、俺もそれでいいよ。」
真人「それじゃあ、それでいいんじゃねえか。そう言えば昴と智花はどこにいったんだ。」
紗季「あ、じゃあ探してきますね。」
そう言って紗季が昴達を探しに行った。
竹中「俺はもう部屋に戻るぜ。」
真人「それじゃあ、俺も戻ることにするか。」
竹中と部屋に戻る途中、何やら騒がしい声が聞こえた。
真人「昴達の声か？一体何やってんだ？」
竹中「さあな？興味ねえし。」
部屋に戻ってしばらくしてから昴が部屋に戻ってきた。
真人「昴、さっきの騒がしかったが、何やってたんだ？」

昴「いや、ちょっとな。」
竹中「ふん、大方変態行為でも働こうとしてたんだろう。」
昴はその発言にイラっときたようだが、すんでのところで抑え込んだようだ。
昴「さて、女子が入浴している間に飲み物でも買ってくるよ。竹中達は何がいい。」
真人「じゃあ、俺はプロテイン。」
昴「そんなものねえよ。適当に買ってくるぞ。竹中は？」
竹中「・・・いや俺もついていくよ。」
昴「うん、お前もついてくるのか？」
竹中「ああ。」
昴「それじゃあ、真人、留守は頼んだぞ。」
真人「おう、分かった。」
そうして、真人は昴達が帰ってくるまでの間、留守番することになった。

ｓｃｅｎｅ．７　球技大会合宿スタート（後書き）

個人的に好きなキャラである竹中の登場シーンがアニメでは削られて少し物足りなさを感じているのは自分だけだろうか。

scene. 8　和解

真人は一人部屋で筋トレをしていると、竹中が戻ってきた。
真人「昴はどうしたんだ？」
竹中「あのコーチならしばらく外にいるってさ。」
真人「そうか。」
竹中「俺は寝るから電気を消すぞ。」
真人「おう、いいぜ。」
そうして、竹中と真人は布団に入った。

翌日、真人が目覚めると昴が隣の布団で寝ていたが竹中の姿はなかった。どうしたんだろうかと思いながら、真人はちょっと早いがランニングをすることにした。
ランニングをしている途中、竹中が走っているのを見かけた。
真人「お、竹中。」
竹中「お前か。」
走っている途中、竹中に出会った。竹中もランニングをしていたらしい。軽い挨拶をして竹中を抜こうとすると竹中もペースをあげてきてついてきた。
真人「大丈夫か？」
さすがに小学生では俺のペースにあわすのは大変だろうから一応声をかけてみた。
竹中「は、大丈夫に決まってんだろうが。お前こそペース落とすんじゃねえぞ。」
どうやら竹中は相当の負けず嫌いらしく、必死に最後までついてきた。竹中と会った時には走る予定の距離は大体走り終えていたことが幸いした。
竹中「・・・ばかのくせにやるじゃん。」
走り終わったときに竹中のそんな声が聞こえた。どうやら自分のこ

とをそれなりに評価してくれたらしい。
真人「お前はこれからどうするんだ？」
竹中「俺は体育館で朝練をする。」
真人「それじゃあ俺も混じっていいか？」
竹中「・・・・ふん、早くしろ。」
そんなわけで竹中と昴達が来るまでの間、二人で朝練をすることになった。
真人「そういや、お前真帆とはどうなったんだ？」
練習の途中に竹中と真帆の喧嘩はどうなったのか聞いてみた。
竹中「お前には関係ないだろう。・・・まあ、俺にも非があったかもしれねえけど。」
ぶっきらぼうながらも答えた。真人はこの返事を聞いてこの分ならあとは昴に任せておけば大丈夫だなと思った。その後もなんだかんだいいながらも初心者の俺にバスケの練習に付き合ってくれた。なかなか根はいい奴なのだろう。

昼食は、どうやらお好み焼きをつくることに決まってみんなで作ろうとしたのだが、そこで紗季の意外な一面を見ることになる。厨房には紗季の怒声が飛び交い、結局紗季が最終的に一人で作ることになりできるまでみんなで正座して待つことになった。
真人「一体どうしたんだ、紗季は？」
紗季の変わりように思わず疑問が口をついて出た。
愛莉「あの、紗季ちゃんの家は［なが塚］っていう店をやっているんですけど、そこで店のお手伝いをしているんです。それでお好み焼きとをつくることになるといつもああなっちゃって。」
真人「そういうことか。」
その後、みんなでお好み焼きを食べた。
真人「うめえ。これは俺の筋肉中を駆け回るうまさだぜ。」
お好み焼きはおいしく真人は叫んだのを見て紗季は誇らしげにほほ笑んでいた。真人は何回もおかわりをした。とはいえ、場は妙な緊

張感が支配していて真人以外はその緊張感に飲み込まれていたため
みんなは無言で箸を進めていたのだが。

昴「さてと、みんな今日は二人組になってチーム決をしよう。」
昴が提案した。その提案に紗季と智花、愛莉とひなたはすぐにお互いグーパーを始めた。すると残るのは真帆と竹中になった。
竹中「・・・・・・。」
真帆「・・・・・・。」
お互いしばらくの間無言になった後
竹中「・・悪かった。お前のことちょっと勘違いしてた。」
真帆「なっ、おいやめろよ。お前がそういうことをすると似合わねーから。」
真帆は竹中の謝罪に顔を真っ赤にして慌てた。しかし、本心から拒絶はせず
真帆「あー、もう。いいからジャンケンするぞ。お前しかのこっていないから仕方ねえ。」
竹中「それはこっちのセリフだっての。」
そうしてお互いじゃんけんをした。

バスケを通してわだかまりが完全にとけた夜
真人「ひなたと竹中がいなくなった？」
ひなたと竹中が突然姿が見えなくなった。
昴「もうこんな遅い時間だし、心配だな。・・・・よし、じゃあ俺が探してくる。」
そう言って昴が行こうと立ち上がったが
智花「あの、私たちもいかせてください。」
愛莉「私たちじゃ役に立たないかもしれませんけど、お願いします。」
真帆「わ、私も行く。」
紗季「あの私もお願いします。」

智花達が自分たちも行くと言いだした。その姿に昴も気変わりしたようで
昴「わかった、それじゃあ真人と俺の二つのチームで手分けして探そう。」
そうして、昴には智花と紗季、真人には真帆と愛莉という二つの組に分けて捜索することになった。

真人「・・・おい、大丈夫なのか真帆？」
真帆はペンライトを何本も身にまとったいでたちをしていた。
真帆「だ、だ、大丈夫ですよ。」
明らかにどもっていた。
愛莉「でもここらへんって暗くて少し怖いです。」
周りは明かりは少なく確かに薄暗かった。校門付近を捜索していると
「ガサガサっ。」
何か物音が聞こえた。
真帆「ひぎ！」
愛莉「きゃっ！」
真帆と愛莉はその音に驚いて真人に飛びついた。バランスを崩しかけたが何とか踏みとどまる。
真人「何だ、今の音は。」
愛莉「わっ、分かりません。」
2人とも恐怖心をいだいてしまっらしく、震えていた。
真人「とりあえず、見てみるぜ。」
このままではしょうがないので二人を置いて真人はその音がした方向に近づく。すると
真人「！」
黒い服に身を包んだ男が、何やらゴミを漁っていた。どう考えても不審者としか見えなかった。
真人「誰だ、お前？」
するとその男は真人に気づき、こちらに向かって突進してきた。

不審者「うおっ。」
真人は瞬間的に男に向かってパンチをした。すると男は一発で気絶して倒れた。
愛莉「真人さん、大丈夫ですか？」
真帆「大丈夫か、まーたん。」
２人が心配して駆け寄ってきた。
真人「大丈夫だがよ、こいつは誰だ？」
愛莉「あの、長谷川さんに連絡しましょうか？」
真人「ああ、頼む。」

その後、その不審者は警察に連行されることになった。どうやら、最近近所の学校のゴミ捨て場を漁っている男がいるということで警察も捜査していたらしい。肝心の竹中とひなただが、どうやら竹中がひなたにバスケを教えていたということで無事だそうだ。美星が大体のことを処理してくれたようでけが人も出なかったため、合宿は続行となった。
真帆「一発のパンチで倒してさ。」
その後、真帆がみんなにこのことを話しまくり
ひなた「おー、おにいちゃんかっこいい。」
真人は尊敬のまなざしを向けられていた。
愛莉「でも、あのときすごく心配しちゃいました。」
真人「こんな時のための筋肉だからな。筋肉があれば無敵だぜ。」
昴「何でも、警備員の死角を突いて侵入してきたみたいだな。」
紗季「まったく、何でこんなことをするのかしら。」
そんな会話をした後、昨日と同じく女子達から風呂に入っていった。

scene. 8　和解（後書き）

ー女子の成長日記ー
紗季「でも学校に不審者がでるなんて怖いわね。」
真帆「ビビってるのか？」
紗季「いや、さっきまで暗くてビビってた奴に言われたくないから。」
ひなた「おー、ひなた全然気づかなかった。」
智花「不審者が出たのはひなたがいた方向の反対側だったからね。」
愛莉「でも、真人さんのおかげで助かりました。」
紗季「そう言えば愛莉、帰ってから真人さんの方ばっかり見ていたわよね。」
愛莉「そ、そんなことないよ。」
真帆「ふむ、愛莉はまーたんのこと好きなのか？」
愛莉「す、好きっていうわけじゃ・・。」
紗季「ふふ、おもしろくなってきたわね。」

ｓｃｅｎｅ．９　夜の冒険（前書き）

パソコンが壊れて修理が終わったので約１か月ぶりの投稿になります。

scene. 9　夜の冒険

真人は竹中、昴と一緒に風呂に入った。
昴「にしてもお前、いい体してるよな。」
真人「ふっ、照れるぜ。」
竹中「ていうか、三人も一緒にいると狭えな。先に上がるぞ。」
昴「おう、分かった。」
その後、真人がお湯につかっていると
昴「俺も上がるよ。お前はまだ入っているのか。」
真人「ああ、しっかり筋肉に汗をかかせねえとな。」
そして昴が出てからしばらくして上がると
真人「まだいたのか。そこに何かあるのか？」
昴がかごの一点をみつめて立っていた。
昴「いや、何もない。」
そう言って昴は出て言った。そのかごを見てみたが言っていた通り何もなかった。
真人（何だったんだ？）
そんな疑問を抱きながらも真人は部屋に帰った。

夜中、真人が目を覚ますと隣にいるはずの昴と竹中がいなかった。
真人「あいつら、どこにいったんだ。」
真人はそんな疑問を抱いて、廊下に出てみると竹中と昴が廊下を歩いているのが目に付いた。
真人「おーい、昴、竹中、一体どこにいくんだ？」
その声に肩をビクンとさせながら昴達は振り返った。
昴「よ、よう。どうしたんだ、真人？」
真人「いや、お前らがいないんで廊下に出てみたら見かけたから声をかけたんだけどよ。」
竹中「い、いやちょっと運動でもしてこようかなと思ってな。」

昴「お、おう。ちょっと眠れなくてな。」
昴達はそわそわしながらそう答えた。
真人「運動なら俺も一緒にいくぜ。」
昴「いや、その前にすることがあってな。」
真人「すること？」
竹中「おう、だからお前は寝てていいぞ。」
真人「なら俺も付き合うぜ。俺もお前らと一緒に筋肉を鍛えたいしな。」
そう言うと、竹中と昴は何やら相談を始めた。その相談が終わると昴が口を開いた。
昴「真人、運動をする前に俺達にはやらねばならぬ重要な任務があるんだ。」
真人「重要な任務？そいつは筋肉が必要な事態か？」
昴「ああ、お前にも手伝ってもらいたい。」
昴は何やら真剣な様子でそう言った。
昴「実は智花達の部屋にこれから潜入しなくてはならない。」
真人「智花達の部屋に？」
昴「ああ、そうしなければならないんだ。」
正直、真人にはわけがわからなかったがその気迫には逆らい難いものを感じた。
真人「事情はよくわからねえが何をやればいいんだ？」
昴「うむ、お前には俺たちが部屋に入っている間に廊下で誰か来ないかどうか見張っていてほしい。」
真人「分かったぜ。誰か来たらお前らに合図を送ればいいんだな。」
昴「ああ、その間に俺と竹中はミッションをクリアする。」
真人「ところでお前らは何をやるんだ？」
ふと真人が疑問を口にしたが
昴「世の中には知らないほうがいいこともあるんだよ。」
悟りきったような昴の言葉にこれ以上疑問を口にすることができなかった。

女子たちの部屋の前に着くと
昴「よし、お前はここで見張っていてくれ。」
竹中「しくじるんじゃねえぞ。」
真人「おう、俺の筋肉にかけてやるぜ。」
こうして誰かに見つかったら即終了となるミッションが始まった。

竹中と昴は部屋の中に入るとそーっと押入れを開けた。
竹中「ここまでは予定通りだな。」
昴「油断するな。こういうのはうまくいきそうなときに思わぬ落とし穴があるもんなんだ。」
二人が何故押入れに入っているかというと、別にやらしい気持ちがあるわけではない。いや、傍目から見ると十分不審人物なのだが。
二人の手には今、ひなたのパンツが握られている。何故こんな状況になっているかというと、ひなたと竹中を探しに行った際に昴が道端に落ちていたひなたのパンツを拾ったのが始まりだった。そのままそのことを言い出せないまま、脱衣所に置いて誰かが拾ってくれることを期待していたら竹中がそれを拾ってしまい、成り行きでそのまま持って行ってしまった。そのため、昴と竹中はこうして二人でパンツを返しに行っているというわけである。
昴「後は、バックを開けてこれを入れれば終了だな。」
竹中「早くしろよ。」
こうして順調にミッション成功となるかに思えたその時
「ギー、ギー」
何やら廊下から足音が聞こえてきた。
真人「誰かこっちに来たぞ。」

真人が廊下で見張っていると何やら足音が聞こえてきた。急いで昴達に伝えようとしたが、相手は予想外の早さを見せてこちらにやってきていた。
真人「誰かこっちに来たぞ。」

と真人が中の二人に告げた時は既にその人物はこの部屋にかなり接近していた。
昴「まずい、ミホ姉かもしれない。」
さらにまずいことに今度は押し入れの中にあった荷物が崩れて落ちてきて大きな音を立てた。
真帆「何だ、敵襲か。」
真帆のその言葉を境に熟睡しているひなたを除いてみんなが起きだした。
昴「こ、これはまずい。」
真人「どうするんだ。」
竹中「くっ、ひとまず隠れねえと。」
そういって竹中はロッカーの中に身を隠した。しかし、そのロッカーの大きさからして二人が入れる広さはない。そうしている間にも室内の女子が電気を探し、足音も近づいてきていた。
昴「くっ。」
昴はそうつぶやくと近くにあった布団の中に入り込んだ。このままでは真人だけ発見されてしまう事態になる。真人も思わず近くにあった布団の中にもぐりこんだ。

ｓｃｅｎｅ．９　夜の冒険（後書き）

久しぶりに文章を書いてみたせいか、どうも違和感を感じながらも書きました。次回は真人がはたしてどうなるのかという話になります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2480w/

ロウきゅーぶ!に井ノ原 真人がいたら

2011年10月21日21時15分発行